

1 旧入村質店 (現茶房ひし伊)



啄木夫人節子が通った質店。節子は、行李(こうり)ごと呉服を入村質店へ質入。行李は、そのまま流れそうになったため、後日、義弟宮崎郁雨が請け出した。

2 石川啄木居住地跡



詩人石川啄木が、家族とともに暮らした青柳町の借家があった場所。函館では、文芸結社「首蓆社」(ぼくしゅくしゃ)の同人達と幸せな時間を過ごし、故郷から呼び寄せた家族とともに新生活を送っていた。不幸にも明治40年(1907)の大火により、勤め先の弥生尋常小学校や函館日日新聞社が焼けてしまい、新たな職を求めて札幌へ旅立った。

3 新善光寺



啄木は、函館の文芸結社首蓆社に入り同人雑誌「紅首蓆」(べにまごやし)で「乞食と語る」という題の体験記を執筆することとなった。啄木は、函館に来たばかりと辞退を申し出たが許されず、「寺に行けば乞食に会えるだろう」と思い同寺を訪ねた。

4 東海山地蔵堂



山号の東海山は「東海の小島の磯の白砂にわれ泣きぬれて蟹とたはむる」にちなんだもの。毎年啄木の命日である4月13日に啄木忌が開催されており、平成23年(2011)は100回忌を迎えた。

5 石川啄木一族の墓



啄木と妻節子、愛児、両親らが眠る墓。啄木は明治45年(1912)4月に満26歳で短い生涯を閉じ、その遺骨はいったんは浅草の等光寺に預けられたが、節子夫人の希望で遺骨は函館に移され大正2年(1913)、啄木の愛した立待岬に墓碑が建てられた。現在の墓は、大正15年(1926)に義弟宮崎郁雨らによって建立されたもの。墓石には、啄木自筆の歌碑が刻まれている。「東海の 小島の磯の 白砂に われ泣きぬれて 蟹とたはむる」

6 宮崎家一族之奥城(墓)



宮崎郁雨は、明治18年(1885)新潟県に生まれる。その後、一家で来函し、明治39年(1906)文芸結社首蓆社ができると、その同人となった。翌40年(1907)啄木が来函後は、物心両面にわたって暖かい援助を続け、同42年(1909)啄木の妻節子の妹堀合フキと結婚した。郁雨は、家業(味噌製造業)を継ぐかたわら、短歌づくりを続け、昭和37年(1962)に亡くなった。墓の右隣にある歌碑は、昭和43年(1968)函館図書裡会が建立。「踊躑(まんさん)と 夜道をたどる 淋しさよ 酒はひとりし 飲むものならず」

7 与謝野寛・晶子の歌碑



昭和6年(1931)に与謝野寛・晶子夫妻が来函の折に詠んだ歌が刻まれている。この歌から、与謝野夫妻が、函館で啄木の義弟宮崎郁雨や、当時啄木資料の保存に尽力した函館図書館長・岡田健蔵と親交をあたためていた様子が伝わってくる。「浜菊を 郁雨が引きて 根に添ふる 立待岬の 岩かげの土」 与謝野寛 「啄木の 草稿岡田先生の 顔も忘れじ はこだてのこと」 与謝野晶子

歌人石川啄木が魅せられた函館 ～啄木の足跡で「そっと句を詠む」～

所要時間 90分 距離 2.8km 消費カロリー 270kcal ※消費カロリーはおおよその目安です。



まだある! 啄木ゆかりスポット ● 函館市文学館
亀井勝一郎や長谷川4兄弟をはじめとする函館ゆかりの作家たちの業績や文学作品を展示。特に石川啄木のコーナーは直筆原稿を公開するなど全国的にも高く評価されている。平成5年(1993)4月開館。

市民から「八幡様」の愛称で親しまれている函館を代表する神社。

箱館戦争で戦死した旧幕府脱走軍の霊を弔うために建立された碑。

まだある! 啄木ゆかりスポット ● 啄木小公園
国道278号線沿いに、啄木と最も縁のある大森浜を望む啄木小公園がある。そこには昭和33年(1958)に寄贈された啄木の座像があるほか、土方・啄木浪漫館が隣接している。

石川啄木(1886~1912)
詩人、歌人。本名 一(はじめ)。岩手県生まれ。中学時代「明星」を読んで与謝野晶子らの短歌に傾倒し、文学への志を抱く。その後、啄木の名で「明星」に長詩が掲載され、文壇で注目される。故郷浜民村(現盛岡市)を離れ函館を訪れてからは、文芸結社「首蓆社」の仲間らと充実した生活を送り、132日間という短い函館生活であったが、「死ぬときは函館で」と言わせたほど啄木は函館の人と風物を愛していた。

※石川啄木記念館所蔵

※最新の情報は各施設等であてお問合せください。